

最後に初
参加者の
顔を
+
明治大学
川口研
学
生も



ハード面からの京島・向島の比較では、区画整理の有無や細街路、長屋の分布状況などおなじみの分析の他に、マンション建設による新住民流入の可能性や、消火器の分布から被災に対する考え方の違いを拾い出すなど、現場を歩いて見つけた興味深い視点がちりばめられています。京島のまちづくりに対しては、区と2人3脚で設置された、京島地区まちづくり協議会を軸にしたハード面での実践(コミュニティ住宅など)への評価とともに、現状の衰退感が、地元住民へのヒヤリングから浮かび上がってきました。要因として、行政からの補助金の減少・停止がまちづくり事業用地の入手や利用を停滞させたこと、協議会の高齢化固定化、そして、地域の権利関係の複雑などが指摘されています。向島のまちづくりでは主体に着目し、住民主導期と市民主導期に区分して見ます。住民主導期には、「一言会」が結成され、路地専や防災まちづくり出版、一寺言問集会所のように住民から行政に提案、実現したところへの評価がヒヤリングからも得られつつ、現在の活力のなさにマイナスイ感も出ています。「川の手倶楽部」は、市民主導期までの移行期に位置づけられ、地域企業や大学などの「市民」と住民がつながるベースであり、イベントを通じて域外への関係づくりは進んだけれど、地元住民の参加という面では希薄であるとの評価が出ています。そこから、「向島学会」が形成され、国内外への情報発信、メディアへの登場は路地ブームと相まって格段に多くなったけれど、地域密着度の低さは依然として課題に挙げられています。活動の主軸も防災から地域活性化へとシフト

2 住環境リスクと防災意識
東工大原口さんの修士論文の一部で、06年におこなった「一寺言問のまち・住まいの防災と安全に関するアンケート調査」結果報告です。住環境リスク、特に防災と避難に対する住民の実践と意識を聞いています。特に住民自身による避難経路や防災/避難危険箇所の指摘などが、行政(と専門家も)の一般認識とは微妙に異なる答えが導かれていくようです。路地を危険だとする一方で路地を日常生活圏とする住民にとって、路地は住環境リスクにとつてどのような意味を持つのか・・・。今後の研究に期待です。

しています。一言会と向島学会の比較では、住民/新住民、防災/地域活性化、情報共有/情報発信、などの対比項目を見出ししています。京島と向島のまちづくりは、防災/地域活性化、行政主導/市民主導、固定的/流動的といった対比的な様相を示し、京島の問題点としては「停滞と閉鎖性」、向島では「地域密着の弱さ」といった問題が抽出されました。そこから、京島では外部からの参入を受け入れる体制づくり、向島では住民との情報交換、が今後の課題として見えています。こうした分析に対して地元住民でもある学会会員からは、「外から来た人が向島をよく発見して入れる」「外からの視点を喜んで受け入れる」とともに、「外からの視点だけでなく、内に入っている視点も大事だから、住んでみて」「見ることも住むことの違いもさまざまにあるはず」「固定化した協議会だからこそできる新たな動き」など、多くの発言と励ましそして期待が語られました。



『向島アート・まち大学』
06年4月から順調に講座を開講しており、他地域との交流や若手アーティストを講師に招いた講座、コラボレーションによるワークショップなどが紹介されました。詳細はホームページをご覧ください。
空き家プロジェクト
いくつかの具体的な案件が持ち込まれています。そのうち、1号案件は耐震補強を含めた改修が所有者の了解と地域工務店の協力を得て、実現する運びとなりました。2号案件は建て替え事業(ハード面+ソフト面)案を作成し、関係者に提案しました。この先も資金ファンドのあり方など、実質的な実現に向けての方法を考えていくこととなります。
向島マッピングプロジェクト
鳩の街をベースに毎月一回集まっている「寺島の集い」のメンバーで、向島エリアのまちマップづくりを進めています。11月23日にはワークショップとしてまち歩きとまち資源拾い出しをおこないました。07年2月4日にまち歩き第2回目を予定しています。
懇親会(忘年会)
06年11月に鳩の街商店街の旧「ウナモノ」(に飯)トリのマークの2人が開店した「こぐまカフェ」に入りきらないほどの大勢が集まりました。みんなが集まる街の拠点ができたことで、さらなる展開も期待できそうです。

